

松江市東部所在の後期～終末期古墳採集遺物について

岩 本 真 実

-
1. はじめに
 2. 松江市東部所在の後期～終末期古墳について
 3. 各古墳採集遺物について
 4. 採集遺物からみる松江市東部における古墳時代後期～終末期の古墳
 5. おわりに
-

1. はじめに

島根県教育庁埋蔵文化財調査センターと古代文化センターでは、松江市東部に広がる意宇平野とその隣接地である大橋川沿岸に所在する魚見塚古墳と東淵寺古墳という2基の大型古墳について、平成23年度から26年度にかけて、基礎資料を得るための発掘調査をおこなった。2016年3月には、その成果を『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書—松江市東部における古墳の調査(2)—』(島根県教育委員会2016、以下『本報告書』と略称)として刊行している。

この報告書作成作業の最終盤、埋蔵文化財調査センター内にて、魚見塚古墳やその周辺に所在する古墳時代後期の古墳で採集された遺物が収蔵されていることが判明した。これらの遺物のなかには採集された際の情報が全くなく、出土場所や収蔵までの経緯が不明なものもあったが、一部の遺物に関しては、記された情報と聞き取り調査の結果から、1988年に採集されたものであることがわかった。当時の記録によると、同年に踏査、遺物採集された古墳は、魚見塚古墳、東淵寺古墳の他、手間古墳、竹矢岩船古墳である。いずれの古墳も松江市東部における古墳時代後期の様相を探るに重要な位置を占める古墳であるため、情報を公開し正式に収蔵する必要が生じたが、『本報告書』に併せて記載するには間に合わず、稿を改めて報告することとした。ただし、東淵寺古墳については、当時踏査され遺物が採集された記録が残るが、現在のところ遺物の所在が不明であるため、小稿では報告しえない⁽¹⁾。

なお、2015年に山代方墳で採集された遺物も埋蔵文化財調査センターで保管されており、古墳時代終末期における意宇平野の様相を探る一助となる資料であるため、併せて紹介したい。

2. 松江市東部所在の後期～終末期古墳について

小稿で報告する遺物が採集された古墳の立地する大橋川から意宇平野にかけての地域についての地理的・歴史的詳細は『本報告書』に詳しいが、ここでもその歴史的環境についてごく簡単にではあるが触れておきたい(第1図)。

魚見塚古墳、手間古墳、竹矢岩船古墳は、松江市東部を東流する大橋川の南北沿岸に互いに近接して所在する。大橋川の川幅が最も狭まるこの地点は、古代においては朝酌渡が想定される交通の要衝であり、出雲国府のおかれた南に広がる意宇平野から隠岐へ向かう枉北道が想定される付近には、古墳時代前期から後期初頭にかけても大型墳が累代的に築造される地域として注目される⁽²⁾。この「大橋川の谷の古墳群」のなかで、竹矢岩船古墳は、露出している石棺および採集された埴輪や須恵器から、大橋川沿岸地域に継続して築造される大型墳のなかでも後半、古墳時代中期末～後期初頭に位置付けられる。魚見塚古墳と手間古墳は、造墓活動の中心が山代・大庭古墳群に移って以降、山代二子塚古墳と近接する時期に大橋川沿岸地域に築造されたと考えられている(島根大学法文学部考古学研究室2002、島根県教育委員会2016)。なお、魚見塚古墳は大橋川北岸の橋北地域(池淵2016)と、手間古墳と竹矢岩船古

墳は安来地域との強い関係も指摘されている(池淵2016、藤永1997)。

6世紀になると、先に述べたように、大庭鶏塚古墳を端緒として⁽³⁾造墓活動の中心は大橋川沿岸域の南西、意宇平野北西に聳える茶臼山の西麓へと移動する。この山代・大庭古墳群の近辺には有古墳群、大草古墳群といった複数の古墳群が認められる。極めて狭い範囲に出雲地域最大の前方向墳である山代二子塚古墳を筆頭とした首長墓級の古墳が多数築かれる特殊な状況が生じており、古墳時代後期から終末期にかけての出雲地域について検討する際に重

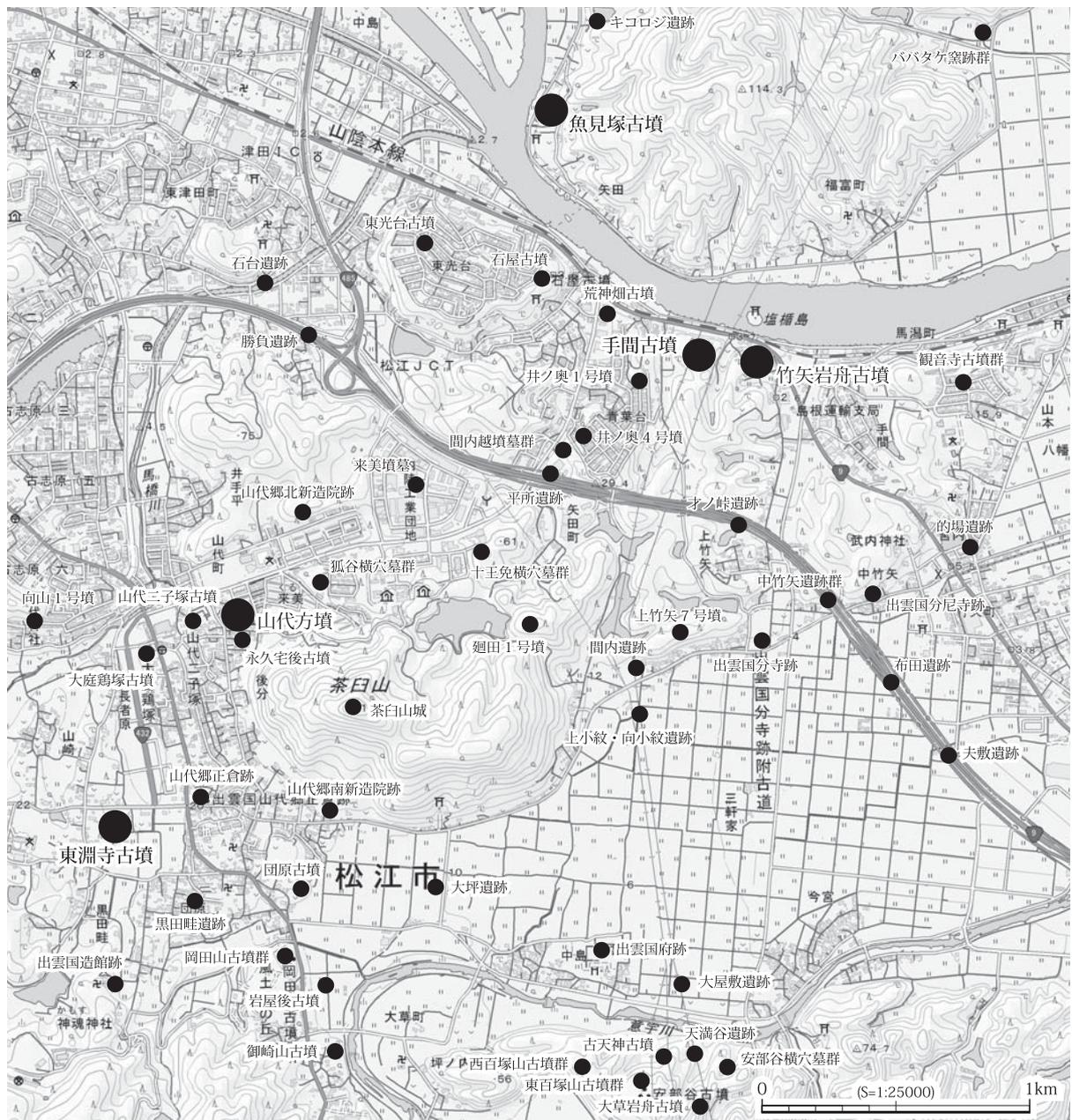
要な地域となっている。山代方墳はこの地に立地する古墳時代終末期の大型方墳であり、最終段階の首長墓として重要な位置を占めている。

以上、小稿で報告する各古墳について概観したが、以下、古墳ごとに採集遺物について報告したい。

3. 各古墳採集遺物について

(1) 魚見塚古墳

魚見塚古墳は、大橋側北岸に築かれた全長62m前後の前方向墳である。詳細は『本報告書』にあるが、はじめにその詳細が報告されたのは島根大学考

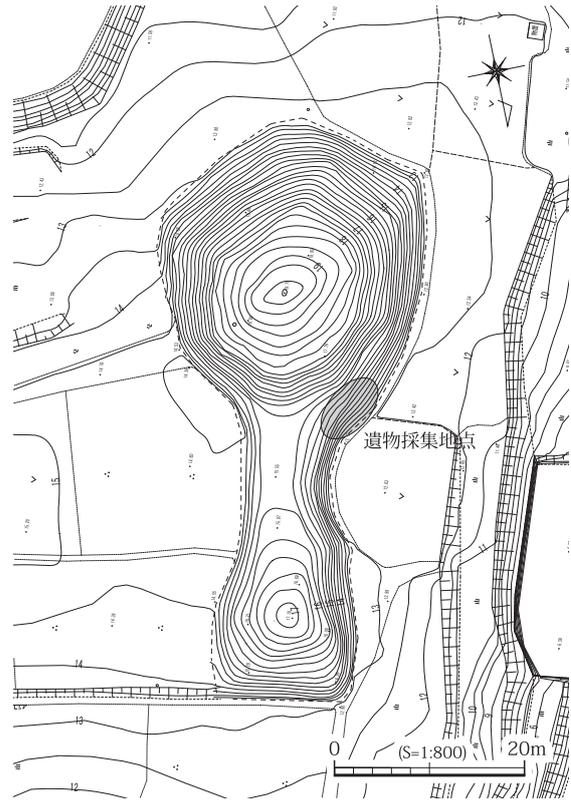


第1図 関連古墳位置図

古学研究会により実施された測量調査報告であり（島根大学考古学研究会1972）、遺物としては、島根大学所蔵の須恵器の出雲型子持壺と大甕が知られていた（渡辺1986、島根大学考古学研究会1995c）。近年では遺物の年代から6世紀中葉から後葉頃の古墳と考えられてきた（島根大学考古学研究会1995c、池淵2015）。埋蔵文化財調査センターの発掘調査でも多くの出雲型子持壺と大甕片が出土したほか、古墳の時期を示す資料として、墳丘西側の溝から有蓋高坏とその蓋2セットと直口壺が出土した。これらの須恵器を検討した結果、筆者は『本報告書』で魚見塚古墳を出雲3期の古墳として位置付けた。なお、埴輪の存在は知られていない。

さて、1988年の踏査記録によると、古墳の状況は島根大学の測量調査や埋蔵文化財調査センターの発掘調査前の状況と同様、開墾により大きく削平された古墳の周囲を畑や茶畑が囲んでおり、後円部西側の畑で土師器片2片、西側くびれ部の斜面では、須恵器の甕頸部・胴部片が瓦などととも採集されており（第2図）、そのうち頸部片1点を図化した（第3図）。肩部と頸部の接合状況がよくわかる破片で、頸部の径は約32cmを測る。肩部内面は頸部との境界付近までナデ消された同心円当て具痕が認められる。頸部外面上半には肩部に近い部分とは異なるカキメ風の丁寧なナデが施される。このほか採集された須恵器片はいずれも外面に格子風タタキ、内面に同心円当て具痕のある胴部片である。器壁が直線的な大型品の破片であるため出雲型子持壺ではなく大甕であろう。

島根大学の測量調査で須恵器が採集された地点は定かでないが、発掘調査では大甕は量の多寡はあるものの前方部のトレンチを含むほぼ全てのトレンチで出土した。ここで報告した遺物が採集された地点

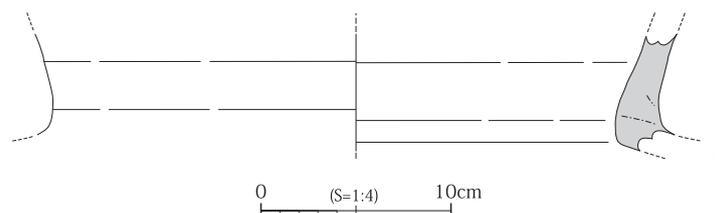


第2図 魚見塚古墳遺物採集地点

はくびれ部墳丘斜面であり、原位置とは遊離した資料ではあろうが、古墳全体に出雲型子持壺と大甕が配置されていたという『本報告書』での想定と矛盾はしない。

（2）手間古墳

手間古墳は、大橋川を挟んで魚見塚古墳の対岸に位置する出雲地域最大級の前方後円墳である。1940年頃に中学生により発見され、その後略測図が示されていたが（山本1951）、1992年から1994年にかけて島根大学考古学研究会により測量調査が実施された（島根大学考古学研究会1995a）。その後1996年には島根大学考古学研究室により発掘調査が実施され、2002年に報告書が刊行されている（島根大学文学部考古学研究室2002）。この古墳の後円部北西



第3図 魚見塚古墳採集遺物



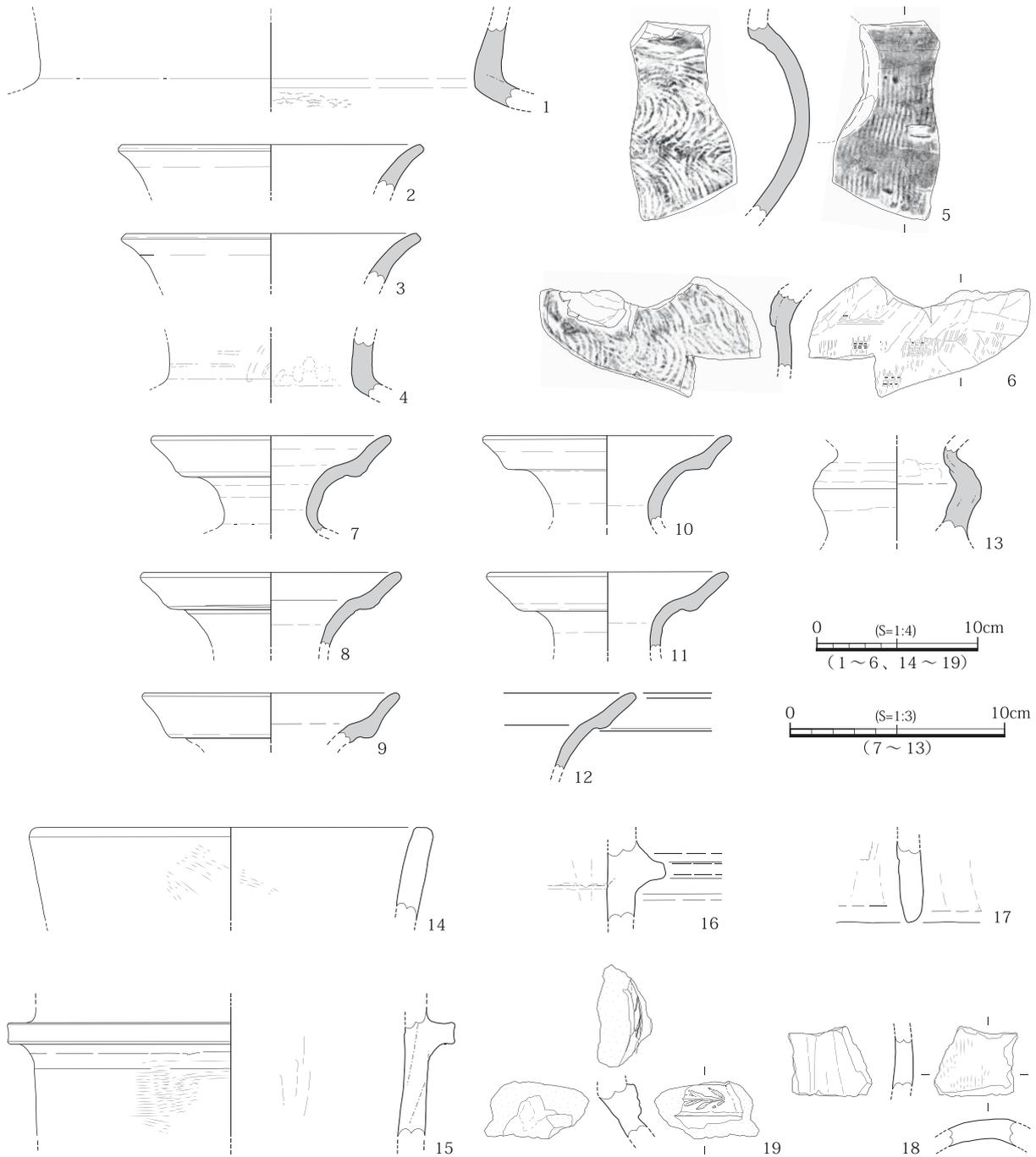
第4図 手間古墳遺物採集地点

側には方形に張り出した地形があり、測量調査の報告時には造り出しと断定することが避けられているが、発掘調査報告ではそのあり方から「造出」状地形としている。遺物には須恵器の出雲型子持壺や大甕、埴輪があり、埴輪には形象埴輪片も含まれるが、確実な形象埴輪はすべて「造出」状地形に設定したトレンチで出土している。また、発掘調査ではそのほか、石室壁体の可能性のある石材が検出された後円部墳頂の凹みに設定したトレンチから鞍金具や雲珠といった馬具も出土している。かねてから「大橋川の谷の古墳群」の検討を重ねていた渡邊貞幸は(渡邊1986等)、この出土を受けて報告書では手間古墳の年代を下げ、6世紀中葉から後半と再考した。こうした経緯で明らかとなりつつある手間古墳の様相については、全長約66mという墳丘規模、古墳時代後期の意宇中枢域で稀な前方後円墳という墳丘形態、出雲型子持壺の出土等、魚見塚古墳・東淵寺古墳との共通点が複数挙げられ、特に、立地や墳丘に関する複数の共通性から指摘しうる魚見塚古墳との密接な関係性から、『本報告書』では手間古墳も検

討の俎上に上げ、意宇平野周辺における首長墓集中化現について考察している(池淵2016)。

踏査がなされた1988年は、詳細な測量調査や発掘調査が実施される以前である。記録によると、1988年の2月と5月に複数の地点で表土上や倒木・伐採・植樹により掘り起こされた土中から須恵器や埴輪片が採集されている(第4図)。なお、後円部北西側については「果樹園の区画によって後円部の一部が壊されており、その際に出たものがまとめて墳丘よりに土とともにあげられている」と記述されており、古墳の西側一帯を広く果樹園と図示している。これは「造出」状地形一帯のことかと思われるが、方形の張り出し地形についての詳細は不明である。ただし、この地点でのみ「器財片」1点を採集しており、発掘調査成果と一致する。ここでは、形象埴輪を含む19点を図示した(第5図)。

1は大甕の頸部片である。肩部にいたる内面には同心円当て具痕がのこるが、上部はナデ消されている。2から13は出雲型子持壺片である。2・3は親壺口縁部片で、丁寧なヨコナデで仕上げられているが、4の親壺頸部片は内面に粗い指オサエが残る。5・6は親壺胴部片で、いずれも外面には平行タタキ後弱いカキメが施され、内面には同心円当て具痕が残る。6では、やや大きく穿孔した親壺肩部に内外面ともに粗いナデにより子壺が貼り付けられる状況が観察される。7から12は子壺口縁部片である。いずれも頸部から外反しつつ屈曲し、外面には明確な段が形成され、端部は丸くおさめている。ただし、10・11の屈曲部分の内面はなだらかである。また、7～9は、外面の段の下にやや太い沈線が1条めぐるが、12はこの粗い沈線が一部途切れており、10・11には沈線が認められない。13は子壺胴部片である。外面は粗いヨコナデ、内面は非常に粗い不定方向のナデが残る。薄い粘土を何枚か重ねて成形している痕跡が断面で観察されるが、島根大学所蔵資料や魚見塚古墳出土例に見られるような、親壺上で子壺を成形したと考えられる痕跡かどうかは定かでない。14～17は円筒埴輪片である。14は口縁部片。内外面にナメハケを施し、端部上面はヨコナデにより平



第5図 手間古墳採集遺物

坦に仕上げられる。15・16は突帯部分の破片である。15は、ヨコハケを施したのち、しっかりと突出した突帯を強いヨコナデにより貼り付ける。突帯の端面はやや凹む。内面には円柱状の当て具痕と思われる縦方向に長い凹凸が認められる。外面は静止痕のないヨコハケが施されるが、破片資料であるため、ストロークの長さは不明である。島根大学資料では、突帯周辺にストロークの長いヨコハケを施す資料が散見されるため（島根大学法文学部考古学研究室2002）、これらに類するハケの可能性があろう。強

いヨコナデにより突帯下に段がつくという特徴も共通する。16の突帯は非常に厚く、15とは様相が異なる。遺存状況が悪く調整は不明瞭だが、内面にハケ目は認められない。17は基底部片である。調整は不明瞭だが円柱状工具によるタタキによると思われるナメの凹凸が認められる。端部はカットされていない。18は外面にタテハケのある円筒埴輪片と思われるが、屈曲が強く、形象埴輪の可能性もある。19は矢羽状の線刻が施された突帯のめぐる形象埴輪片である。突帯下が大きく開き、人物埴輪の一部の可

能性がある⁽⁴⁾。これらの資料のほか、須恵器大甕胴部片、高台付きの坏底部片等も採集されている。大甕胴部片はすべて、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が認められ、内面の当て具痕をナデ消すものが多い。

採集資料について簡単にまとめると、墳丘において出雲型子持壺、大甕、円筒埴輪が、「造出」状地形では、形象埴輪が採集されている。出雲型子持壺は親壺口縁部や子壺接合部片を見る限り既知資料と同様に池淵分類B型である(池淵2004)。円筒埴輪には静止痕のないヨコハケやナナメハケが施され、底部は円柱状工具によるタタキ痕が認められるが、底端面のカット技法は用いられない、といった特徴が挙げられ、既知資料との相違は認められない。

(3) 竹矢岩船古墳

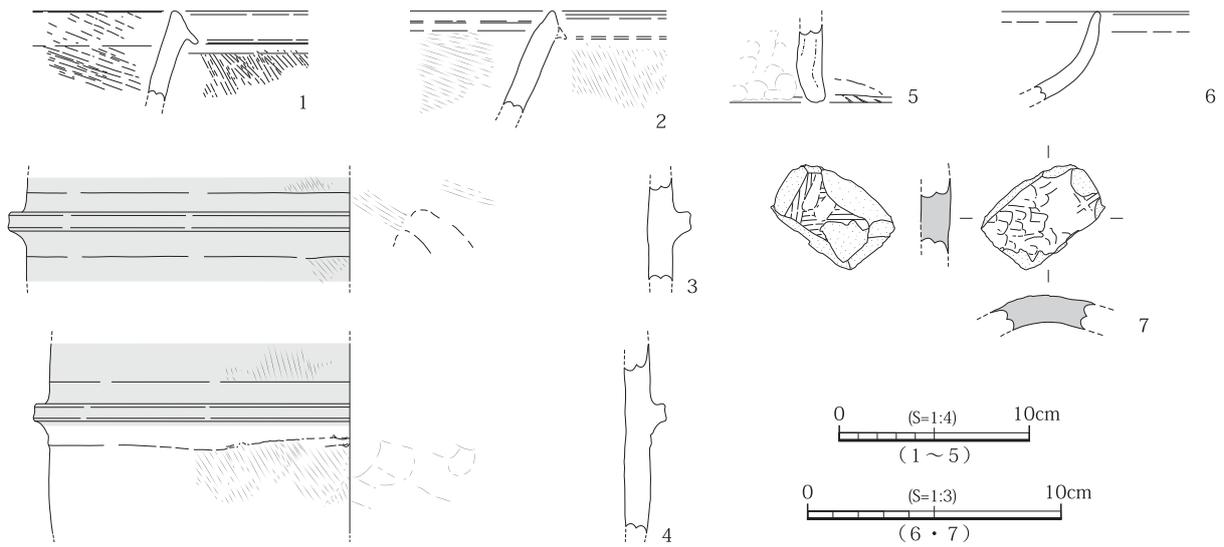
竹矢岩船古墳は、大橋川南岸、手間古墳の200mほど東に立地する前方後方墳である。野津左馬之介は「手間山岩船古墳」の名称で前方後円墳として紹介したが(野津1924)、山本清により略即図とともに前方後方墳であることが示された(山本1951)。1974年には島根大学考古学研究会が測量図を作成

(島根大学考古学研究会1976)、その後、より詳細で広域の測量図を松江北高校考古学部が提示した(松江北高校考古学部2014)。これによると墳長は51mに復元される。後方部に露出している舟形石棺は墳丘規模に則した大型の棺であり、「出雲型舟形石棺」とも呼ばれる定型化した石棺として評価される(山本1966、大谷2015)。また、発掘調査は行われていないが、少量の須恵器と多くの埴輪が採集されている(島根大学考古学研究会1995b、松江北高校考古学部2014)。須恵器は壺甕類体部片の他、出雲1期とされる器台あるいは大甕の口縁部片を含む。埴輪には円筒埴輪と朝顔形埴輪が認められる。円筒埴輪口縁部の形態には上端部が平坦なものだけでなく、端部下端が斜め下へ大きく突出する資料が散見されるが、この特徴的な型式は安来市宮山1号墳と共通する(島根大学考古学研究会1995b、藤永1997、島根県教育委員会・島根県古代文化センター2003、松江北高校考古学部2014)。突帯の突出度は総じて低く、確認できる透かしは円形、内外面に赤色顔料が施されるものもある。体部調整はナナメハケが主体であるが、底部調整には、安来市能義神社奥の院7号墳の円筒埴輪に類するナナメ方向のタタキ痕が認められ(島根大学考古学研究会1995b、大谷2003)、端面をカットするものもある。

これらの遺物は墳丘上・墳丘周辺に細片化して散在していたようであるが(島根大学考古学研究会1995b)⁽⁵⁾、1988年の踏査時には主に墳丘西側で埴輪片が、西側と南側で須恵器片が採集されており(第6図)、埴輪には上記の特徴がそなわっているものが多い(第7図)。1・2は円筒埴輪の口縁部片で内外面ともにナナメハケが明瞭に残り、端部下端が斜め下へ大きく突出する。これは既知の資料にも認められる特徴的な型式で、先述のとおり宮山1号墳と共通する。3・4は突帯部分の破片で、外面にはナナメハケが施され、突帯は低く、赤色顔料が残る。3の内面に部分的に認められるナナメハケが4には認められず、不明瞭ではあるがナナメ方向の押圧のような凹凸が残る。外面の赤色顔料も3は突帯の上下に及ぶが、4は突帯より上にも認められる



第6図 竹矢岩船古墳遺物採集地点



第7図 竹矢岩船古墳採集遺物

ことから、4は3よりも底部に近い可能性がある。
5は基底部片で、部分的に外反しているが、概ね直線的である。外面調整は不明瞭だが、内面には指頭圧痕が並ぶ。端面のカットは施されない。6は土師器碗形高坏の口縁部片で、他に脚部片も採集されているが接合法などは不明である。7は須恵器の小片で、外面には非常に細かな単位のナデが、内面には板ナデや細かなナデのような痕跡が認められるが、器種等は不明。このほか、須恵器の大甕片も採集されている。

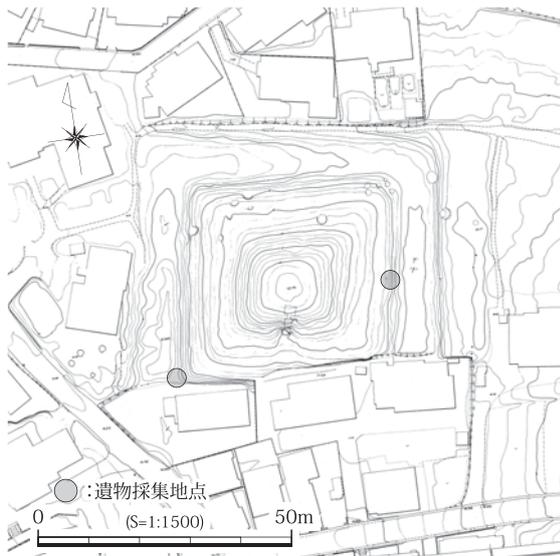
採集資料のなかで、土師器高坏は碗形である点を考慮すれば、石棺や採集遺物の特徴から5世紀末～6世紀初頭とされている当古墳の年代観と矛盾しない。埴輪については、既知の資料と共通する資料であり、特に第7図1・2は当古墳と安来地域との密接な関わりを示すものと言えよう。

(4) 山代方墳

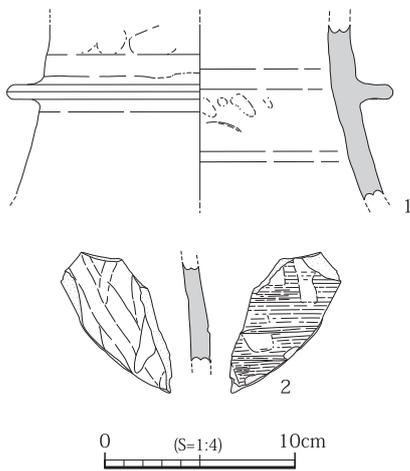
山代方墳は、茶臼山西麓、古墳時代後期の出雲東部最高首長の墓とされる山代二子塚古墳の約100m東に所在する墳長約45mの大型方墳である。古く明治年間から石室が開口しており、円墳として知られていたようであるが、1940年に野津左馬之介により方形墳として紹介されている(野津1940)。1982年から翌年にかけて島根大学を中心として測量調査が実施され、その後の成果報告では、大和政権と関係の強い被葬者像が提示された(渡辺1985)。また埋葬施設に関しては、1987年に出雲考古学研究会によ

り石室の図面とともに新しい段階の石棺式石室であることが示された(出雲考古学研究会1987)。その後、1992年には島根県教育委員会により発掘調査が行われ、墳丘や年代に関するより具体的な情報が得られた(島根県教育委員会1993)。当古墳では古くから出雲型子持壺が採集され(岡崎1983)、発掘調査でも多くの出雲型子持壺と大甕が出土しており⁽⁶⁾、小稿で紹介する採集資料も出雲型子持壺である(第8・9図)。第9図1は脚部片で、粗いヨコナデが施され、突出度の高い錨状突帯が貼り付けられている。これは岡崎雄二郎氏が採集・報告した資料に見られる資料(岡崎1983-3)と胎土、焼成、形態、調整いずれも共通しており、同一個体である可能性が高い。2も脚部片で、非常に粗いヨコハケのようなカキメが施され、沈線が2条めぐるが、これらは部分的にナデ消されてしまっている。これは、岡崎報告で器台型須恵器の口縁部から体部片として報告されている資料(岡崎1983-2)と焼成、色調、調整、施文が共通する。実見したところ、岡崎報告の資料も出雲型子持壺の脚部として良いと考えられ、小稿第9図2と同一個体の可能性が高い。

当古墳の年代は、石室や遺物から7世紀初頭と考えられている。第9図2は、該期の出雲型子持壺脚部にもカキメを施す資料が存在することを示すが、おそらく単発的なものであり、従来の出雲型子持壺の編年に変更を促すものではないと思われる。



第8図 山代方墳遺物採集地点



第9図 山代方墳採集遺物

4. 採集遺物からみる松江市東部における古墳時代後期～終末期の古墳

出雲東部においては古墳時代後期に造墓活動の中心地が「大橋川の谷の古墳群」から山代・大庭古墳群へ移動するが、前項で報告した資料はまさにそれらの古墳群に築かれた大型墳で採集されている。報告した全古墳に共通する遺物はないが、各古墳についてここで簡単にまとめておきたい。

魚見塚古墳と手間古墳の出雲型子持壺はともに池淵分類B型である(池淵2004)。『本報告書』のとおり、魚見塚古墳資料には池淵分類B型では従来認められなかった親壺透かしが存在することが判明した

が、脚部に装飾がない点や子壺の製作方法などは両古墳に共通する。特に、親壺上で子壺を成形したと考えられる子壺製作方法は完成後には視認できない部分であるにもかかわらず共有しており、これは意宇平野を中心に主流となるC型とは異なる方法である。両古墳の出雲型子持壺の生産は、同一集団によるものではないかもしれないが、近い関係であったと推察される。

また、魚見塚古墳では多数の出雲型子持壺とともに須恵器大甕も一定量認められ、これらは『本報告書』の指摘どおり古墳全体に配置された状況が想定される。手間古墳ではさらに円筒埴輪も各所に設定されたトレンチで出土しており⁽⁷⁾、少数ながら存在する形象埴輪は今回の報告分も含めいずれも「造出」状地形で確認されている点が魚見塚古墳と異なる。『本報告書』では魚見塚古墳と手間古墳の墳丘形態および、背面側における後円部下段の省略という墳丘造作の共通性が指摘されている。墳丘に配置されたと考えられる遺物に関しては、B型出雲型子持壺や大甕の出土という共通項だけでなく、埴輪の有無や「造出」状地形での形象埴輪の配置の可能性といった相違も認められるため、古墳築造に際しては墳形の選択や造作を共有しつつ、墳丘の細かな仕様には各々独自の背景を保持していたと思われる点はいま少し強調しておきたい。

竹矢岩船古墳では、従来報告された資料と共通する埴輪が採集された。宮山1号墳と同じ特徴的な口縁部形態をもつ埴輪が今回の報告資料にも含まれており、安来市域と関係する埴輪が一定量存在していたことが窺われる。すでに述べたように西隣の手間古墳からはB型出雲型子持壺が出土しており、これは松江市東部から米子市付近に偏在する。両古墳の時期にはやや隔たりがあるものの、東向き連続的あるいは断続的な関係性を想起させる。ただし、竹矢岩船古墳は中期末から後期前葉にかけて出雲東部の大型墳に採用される前方後方墳であるが、手間古墳は同時期の出雲東部の大型墳が前方後方墳であるなかで、魚見塚古墳、東淵寺古墳とともに前方後円墳を採用している。墳形の採用や墳丘の細かな仕様

の相違、立地等については、『本報告書』での考察に止まらず今後も検討を重ねていく必要がある。

山代方墳は今回報告した古墳のなかで唯一山代・大庭古墳群に所在する。この古墳群のなかで最高首長の墓と考えられている山代二子塚古墳と山代方墳との時間的開きは大きく、その間の首長の動きについては慎重な検証を要するが、山代方墳は占地企画が検証されるほど山代二子塚古墳に近接して築かれている（渡辺1985）。そのような状況で、山代方墳の出雲型子持壺脚部の広範囲にカキメが施された資料が認められることは興味深い。脚部の装飾は祖型段階の山代二子塚古墳例から退化の一途をたどり、出雲型子持壺の変遷の後半からは区画沈線以外見られなくなるにもかかわらず、最終段階に位置付けられる山代方墳資料に広範囲のカキメが認められるのである。想像を逞しくするならば、この時期山代二子塚古墳に表象された威光を山代方墳の被葬者が意識していたとも考えられよう。

5. おわりに

「大橋川の谷の古墳群」から山代・大庭古墳群へと造墓活動の中心地が移動する現象について、丹羽野裕氏は拠点や幹線道路の移動と関連づけて論じている（丹羽野2009）。また、山代・大庭古墳群に大型墳が集中する現象については、山代二子塚古墳の被葬者である最有力首長とその同族の補佐的人物の墓という解釈（渡辺2002、大谷1996）や意宇中枢域への首長墓集中化現象といった説明がなされている（池淵2016）。小稿では、筆者の力量不足により各古墳ごとの散漫な報告に終始し、墳形の選択や墳丘に配置する器物のあり方、古墳群の移動や首長墓の集中化といった問題について議論を深めることはできなかったが、当地の古墳に関する資料が詳らかになることは今後の出雲における古墳時代研究に資するものであろう。更なる資料の増加を待たねば詳細な検討が困難な面もあるが、今後も資料が蓄積され、充実した検討が行われることを期待する。

小稿で報告した遺物はすべて島根県埋蔵文化財調

査センターにて保管している。

小稿をなすにあたり、熱田貴保氏、内田律雄氏には遺物採集の経緯についてご指導いただきました。また、以下の方々と機関から多くのご教示、ご高配をいただきました。記して感謝申し上げます。池淵俊一氏、今井智恵氏、岩本崇氏、高屋茂男氏、田中大氏、仁木聡氏、松本岩雄氏、島根大学考古学研究室、島根県立八雲立つ風土記の丘

【註】

- (1) 手間古墳と竹矢岩船古墳で採集された遺物の一部は、『竹矢郷土誌』（廣江1989）に報告されている。
- (2) 渡辺貞幸1983、1986、仁木2015等。
- (3) 大庭鶏塚古墳の位置付けについては田中大氏にご教示いただいた。
- (4) 形象埴輪については仁木聡氏にご教示いただいた。
- (5) 松江北高校考古学部2014では、これらの遺物は墳丘東側に丘陵を削って作られたのぼり道付近に集積してあったものとしている。
- (6) 円筒埴輪片も少量出土しており、山代二子塚古墳からの流入である可能性も指摘されているが、少なくとも1片は出土状況から当古墳に伴うものと判断されている（島根県教育委員会1993）。
- (7) 出雲型子持壺と大甕が共伴する例は多く、埴輪と共伴する古墳も少なくはない。有脚IV類の出雲型子持壺に関しては、埴輪消滅後その代替品として使用された可能性が指摘されている（池淵2004、2012）。子持壺の使用については、埴輪生産終焉後の古墳で埴輪が出土する山代方墳の例や子壺のみが出土する事例等も含め今後も検討していく必要がある。

【参考文献・図版出典】

- （第1図には国土地理院発行1/25,000地形図を使用。第2・4・6・8図は以下の文献を一部改変して使用している。）
- 池淵俊一2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』河瀬正利先生退官記念事業会
- 池淵俊一2012「出雲の子持壺集成」『松江市史研究3号

- (松江市歴史叢書5)』松江市教育委員会
- 池淵俊一2015「出雲古墳編年について」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
- 池淵俊一2016「出雲東部における魚見塚古墳・東淵寺古墳の歴史的位置」『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書—松江市東部における古墳の調査(2)—』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書23 島根県教育委員会
- 出雲考古学研究会1987『石棺式石室の研究』古代の出雲を考える6
- 大谷晃二1996「出雲東部における御崎山古墳の位置付け」『御崎山古墳の研究』島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘
- 大谷晃二2003「能義神社奥の院7号墳」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書16 島根県教育委員会・島根県古代文化センター
- 大谷晃二2015「多様な石棺と出雲型舟形石棺」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
- 岡崎雄二郎1983「松江・山代方墳採集の須恵器について」『松江考古』第5号 松江考古学談話会
- 島根県教育委員会1993『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書IX—山代郷正倉跡・山代方墳—』
- 島根県教育委員会2016『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書—松江市東部における古墳の調査(2)—』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書23
- 島根県教育委員会・島根県古代文化センター2003『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書16
- 島根大学考古学研究会1972「魚見塚古墳実測報告」『菅田考古』第13号 島根大学考古学研究会
- 島根大学考古学研究会1976「竹矢岩船古墳について」『菅田考古』第14号 島根大学考古学研究会
- 島根大学考古学研究会1995a「手間古墳測量調査報告」『菅田考古』第17号 島根大学考古学研究会
- 島根大学考古学研究会1995b「竹矢岩船古墳の埴輪について」『菅田考古』第17号 島根大学考古学研究会
- 島根大学考古学研究会1995c「大橋川の谷の古墳群」をめぐって」『菅田考古』第17号 島根大学考古学研究会
- 島根大学法文学部考古学研究室2002『松江市手間古墳発掘調査報告 薬師山古墳出土遺物について』島根大学考古学研究室調査報告第3冊
- 仁木 聡2015「巨大方墳の被葬者像」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
- 丹羽野裕2009「八雲立つ風土記の丘地内の大型古墳と古代の道」『出雲国府周辺の復元研究—古代八雲立つ風土記の丘復元の記録—』島根県古代文化センター調査研究報告書43 島根県古代文化センター
- 野津左馬之介1924『島根縣史』4古墳 島根縣内務部 島根縣史編纂掛
- 野津左馬之介1940「大庭村の方形墳」『史蹟名勝天然記念物』15-8
- 廣江耕史1989「竹矢地区内の古墳」『竹矢郷土誌』竹矢郷土誌編集推進委員会
- 藤永照隆1997「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集 島根考古学会
- 松江北高校考古学部2014「松江市竹矢岩船古墳測量調査報告」『八雲立つ風土記の丘』No.215 島根県立八雲立つ風土記の丘
- 山本 清1951「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会1971年所収
- 山本 清1971「山陰の石棺について」『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会
- 渡辺貞幸1983「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』第23号 島根大学
- 渡辺貞幸1985「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究』第1号 島根大学山陰地域研究総合センター
- 渡辺貞幸1986「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 渡辺貞幸2002「大橋川の谷の古墳群」再考」『松江市手間古墳発掘調査報告 薬師山古墳出土遺物について』島根大学法文学部考古学研究室